
厨二病患者の基地外的思想

破壊神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

厨二病患者の基地外的思想

【Zコード】

Z0713Z

【作者名】

破壊神

【あらすじ】

主人公「バンドの練習をしに行って帰りがてらに遊ぼうとしてたら、よう、よにスケープゴートまがいな事をされちゃいました。そして、神に見殺しにされますた。」

元の世界の神「いや、まじスマン。本当にすまんな。テヘペロ」

この作品は、このサイトで初投稿となるいわゆる処女作です。
初心者による作品ですが、楽しんでいただければ光栄です。

ちなみに、この作品はエブリスタ様にて投稿した作品の改訂版です。
この作品はフィクションであり、実在の人物・団体・事件などとは
一切関係ありません。

裏・プロローグ 1（前書き）

はじめまして、作者の破壊神です。

この作品をお読みになりありがとうございます。

これから、頑張って行きますのでよろしくお願いします。

裏・プロローグ 1

現代、といふか、地球上には存在しないような、例えば、別の世界と比喩していいような、全てが白や黒が入り乱れる空間、いわゆる灰色の空間の中に一人の青年が立っていた。

そこで、青年は語り始めた。

俺は死んだらしい。

突然、こんなことを言つのは可笑しいだろ？が、もつ一度言つ…俺は…死んだらしい…

なぜ、このような事になつたのかは、時を遡る事になるが、聞いてくれ。

（回想）

3時間前

その日、俺が組んでいるバンドの練習をし、練習が終わつた時の事であった。

練習をしているライブハウスは、自分の自宅から自転車、電車の移動手段を用いて、約1時間30分もかかる。

自宅は山に囲まれた田舎にあるため、地元にはライブハウスなどない。

いま、俺が居るような県庁所在地であるような都市部に行かないところはない。

そのため、電車代などもバカにならないため、せっかくだから、遊びまく。という流れになつた。

建前は置いといて、俺自信、ぶっちゃけるとただ、遊びたかつただけなんだが…

そんなこんなで、自分のCDショップで好きなバンドのCDを見たり、アニメイトでお気に入りの今期アニメのグッズなどを購入したり、と今時間を使い込んでいた。

しかし、運命と言つのは時に残酷なものだ。

バンドメンバーと共に夕食の為に、比較的安価で食事の出来るファミレスに向かう為、徒步にて移動の最中だつた。

その時間は、帰宅ラッシュの為か、道路は渋滞をしていた。

それを歩道から、メンバー達と会話をしながら、眺めていた。

歩道者側の信号が青になつた為、横断歩道を渡りうつしたら、普通車がこけらうに猛スピードで向かつて來た。

始めは、その普通車との距離は約200メートルぐらい離れていたため、あまり気にしなかつた。

しかし、お互いの距離が50メートルぐらいに差し掛かると、流石

に違和感を感じた。

その時、普通車に目を向けると周囲の建物の光で照らされていたので、運転手の顔が見えた。

良くみると、居眠り運転をしていたようだった。

これはマズイと思いつたら、俺達と同じく横断歩道を渡っていた人々の中の一人が、「早く渡れっ！」と叫んだ。

周りの人々は歩道へ向かって走りだす中、幼い少女。文字通り、幼女が一人横断歩道へ取り残されていた。

普通車は、横断歩道の目の前まで迫っていた。

俺は、その幼女へ哀れむ目を向けていた。

こんな幼い少女が命の危険にさらされているのか、それに、普通車の出すスピードを見ていると、助かりはしないだろう。

と、思っていた。

そんな事を考えていたら、自分の体が突然動いていた。

(あるえー？ なんで横断歩道に近づいてるの？)

自分自信の思考とは別の“なにか”に操られてる感覺だ。
なんというか、現実味のない感覺が俺を襲った。

「おー！君！－なにをやつてるっ！？」

「なにをやつてゐんだよつ！お前つ？…危ないぞつ…」

周りの人々やバンドメンバーからの声だらう。

絶えず、周りの人々の声がするが、思考がボンヤリとしながら、それでも横断歩道に残された少女の元へ行く。

普通車との距離が10メートルに差し掛かつた頃、俺は少女の目の前に着いた。

今だに、ボンヤリとしながら少女の表情を見ると、笑っていた。

普通、というか、だいたいの人はこの状態を怖がるだろ？しかし、少女はだいたいの人に当て嵌まらないみたいだった。

そして、俺は少女を突き飛ばし、少女の変わりに普通車に轢かれた。轢かれた時、上空へ跳んだ。そんな中でも少女から田を離さなかつた。

否、離せなかつたのだ。

そんな中、今だ、笑みを絶やさない少女…。

（これは、シユールな光景だなあ。）

と考えながら、俺が、俺達が見ていた夢がここで終わるのだらう。と思つた。

ドンッ！

頭から地面に着地したようだ。

尋常ではない痛みが俺を襲う。

痛みに襲われながら、自分の家族、夢への思い、二次元に住まう我が嫁や子、孫達、そして、自分が助けた少女の事を考えた。

たが、周りの人々の声がする。

「だ、大丈夫かっ？」

「誰かっ！救急車を呼べっ！」

「おい、おい！しつかりしろよっ！」

うん、なに言つてゐるかわかるが、言葉を認識できない。俺、死ぬな
…。

と思つた。

そんな中少女が近づいてきた。
少女は口にした。

「さあ、始まるよ。貴方の物語が。」

「えつ？」

「また、逢おうね。」

そこで、意識が途切れた。

以上が、俺が死んだ理由だ。

長すぎてしまつたが許して下さい。

רְאֵבָנָה לְמַלְאָכָה רְאֵבָנָה לְמַלְאָכָה

裏・プロローグ 1（後書き）

「うむ……、こんな物でいいかな？」

話の内容からに、いわゆる転生物です。

メタ発言

プロローグは一話に分けます。

裏・プロローグ 2（前書き）

えりかへりへなつた…

裏・プロローグ 2

どうしていいか途方に暮れていると、どこからか老人特有の声がした。

「なにをシラけた顔をしているのかね？青年よ。」「ん！？」

突然の事だから驚いた。

声の主に目を向けると、ハリーなポッターようじくの魔法学校校長みたいな老人がいた。

しかも、俺の身長（170cmあります）より高く浮いてるし……

あまりに、非現実的だが自分の死を理解してしまった為、一瞬の自暴自棄のように、もうどうにでもなれ。といった考えになってしまって

「ほつほつ、驚かしてすまないね。何分、はじめて下界からの客人な為に調子に乗ってしまったよつじや。」

好々爺よろしくの笑顔を向けてきた。

「ハイツ……やつある……」「クリツ 意味不

とつあえず、笑つて「まかさないで、謝罪しろや、ああん？

「すまんのう、それと先程から態度が変わつておるぞ」

おれ、喋つてないんだが……

「ああ、読心術といつものがあつてのう?」

老人よ…何者だし…

「ワシ?ワシは、いわゆる神かのう」

えつ?…

「なんじやい!…その由こ由せ…」いやあ、ち、うん…

「信じはしないか…」

はい

「即答かのう(泣)…」

宙に浮いた神(核爆)様が泣いている…

この短時間ですごい体験をしたなあ…俺…しかも、神(核爆)様が泣いてるんだぞ??

カオスだつ…

閉話休題

「ゴホンッ…それでは、本題に入らう。君が“なぜ”ここに導かれ
たかを…」「導かれただ…と?」

「つむ、君は、君がいた世界とは別の、ある世界の“意思”、君が死ぬ直前に見た少女がいたじゃろ？」

はい、顔は覚えてませんが、なんといつか、‘違和感’がありました。

「そりじゃ、顔というか、少女と認識出来るが、‘ああいう存在は、存在 자체が大きい為か認識が正確には出来ない、のじや’

言われてみれば…、幼い少女だと認識はしたが、顔の作りまでは、認識出来なかつた。」

ただ、表情で笑つてるのはわかりました。

「なんじやと？表情…そこまで認識出来るとは……」

“どうしました？”

「いや、のう、通常は認識出来るだけでも凄いんじやが、表情まで認識出来るとは…君が“なぜ”あの‘世界の意思’に導かれたか合点がいったよ。」合点というと？

「すまんのう、いくら神でも自分の管轄外の世界の存在には介入出来ないのだよ。」

“どう”とは…って、神は複数いるんですかい！

「つむ、数多の世界がある故に、大体は世界一つに神が一人就くじやが、まあ、例外はいるが…」

はじめしゃまましたよ…

「まあ、君達の世界の人間にはわかるまえ、まあ、簡単な話、君の住んでいた国で八百万と言う言葉があるじゃろ？簡単な話はそういうのいじりじゃ」

な、なるほど… いまいち理解していない

「ちなみに、君は、導かれた」と言つたが、ワシはそこまで介入出来ない…」

そこまで、といつと少なからずは介入出来るんですか？

「つむ、まあ、加護を『えるくらいしか…。まあ、この場所は元いた世界と君を導こうとしている世界との境界線…言い方は悪いが、君は死に、魂が、向こうの世界、に所有権が移つてしまつた…すまんのう」

神は今だ、宙に浮きながらやるせない顔をしている。

「いえ、気にしないでください。神様（尊敬したので普通によびます。）がそこまでおっしゃつてくれるのです。それだけで、うれしいです。」

「そういうてくれると助かるわい。わしらの都合ですまないんじやが、上の命令でのう。事前にこのような事になるのはわかっていたが、ワシの権限では介入は無理なのじや…本当にすまぬ…」

「いえ、本当に大丈夫ですから、ただ、向こうの世界はびっくりの場所なのがを聞きたいです。あと、これからどうなるかも…」

「ああ、把握しているのよ、先程書いた数多の世界の中の一つである」と、その世界は、魔法の世界…。いわゆるファンタジーの世界じゃ

ファンタジー…ゴクリッ

「ちなみに、血生臭い世界でのう。文明は君の元いた世界、すなわちワシが管轄としている世界より科学の進歩などを考えると中世纪一ロッパのような場所じゃ」

なにそれ…死亡フラグの匂いがブンブン…

「長々と話すまないが、もうそろそろ、君の魂は、向こうへ渡る。幸運を祈る。あと、少ないがワシからのプレゼントじゃ、神であるワシの加護を与えよう。ただ、そこまで凄い能力ではないが…ワシの出来る限りの力を与える。」

なにからなにまでみません。感謝します。

「いいのじゃ、元々、ワシが管轄する世界の住民じゃ、少しぐらこぶつしたつて大丈夫じゃろ？。しかし、君は冷静なのじゃな。」

まあ、死んだ事により自暴自棄というか、開き直つてゐるようなものです。なんというか、今の自分の現状が実感しないといつか…。

「なるほどのう（強いと思っていたが、やはり、不安か…。一瞬の自分に暗示をかけての現実逃避をしておる…）むつ、そろそろ時間が…それでは、加護を与えよ。」

神は青年になんか、光を浴びせたつ！　ここに重要な

ちよ WWWWWホ○ミかよ WWWWW (某龍の冒険の魔法に似ていた)

「よし、これで大丈夫じゃ、向こうに言つても元気でのう」

スルーかよ…。ええ、いろいろとありがとうございました。

「なに、氣にするでない。もう、君の存在は向こうへ渡つてこる。君の友人や家族達は任せよ。アフターケアはしつくからのう」

あ、なにからなにまでありがとうございます。（そういえば、家族か…）

「なに、お安いご用じや。（ふむ、自分で精一杯だった為、生前の係わりなどに關しては頭から抜けていたか…難儀なものよ）」

そうして、青年の体は徐々に光の粒子となり始めた。

「もう、時間か…」

「これは…

「いま、君は境界線を渡つてているのじや」

なるほど…

「最後に言い残すことはないかのう？」

ええ……あつますのとも……泣かせてください……童貞で死ぬのは辛いです……しかも、異世界へ拉致です……（泣）

「う、うう……やめい……涙が出てきたのじゅ……仕方ない……向こうでフラグが出来やすい建設士にしてやる」

あ、ありがと「う（号泣）

「うむ、頑張るのじゅぞ……」

は、はい、本当にありがとうございます……（涙目）

そして、俺の体は完全に粒子となり消えた。

「難儀なものじゅ……口調といい態度といい、やはり、不安だったのか……」

老人はその場で思い詰めた顔をしながら、そう呟いた。

裏・プロローグ 2（後書き）

いや～、まさかの……

や、やめてくださいー!反省はしてるんですけどー!

と言うわけで、主人公が精神が不安な為、口調、態度が所々変わらせてみましたが、どうでしたか?

よかつたら、感想をお願いしますm(ーー)m

プロローグ 1（前書き）

更新遅くなつてすみません。

先日まで、修学旅行に行つておりました故。

ちなみに、沖縄に行つてきました。

プロローグ 1

やあ、俺だよ俺！そりやつ、親戚の拓也だよつ…そりき事故ちゅつてさ、三日以内で100万用意してくれない？えつ？受け取り方法？ああ、×××・××××つて口座に頼むよ（「ソ

しばりくお待ちください。

はつー夢か…

つい、俺的な詐欺をしていの夢を見ちまつたぜつ！

とりあえず、セ

神様の所から粒子になつて消えた後に、意識飛んじやつたんだよね

W

もつ、ビックリするほどコートペア的な

あ、あれは除霊方法か

それでや、意識が戻つたのはいいんだが…またしても…ソレドリカ。

そり…俺が居るのはなにを隠そり…田が開きません（泣）

それと、液体の中に居るような…まるでプールや川、海に沈んでる
ような感覚です。はい。

あと、体の姿勢というか体やへそに違和感が…体は思つひとつに動か
なこし、へそにはなにかが付いてるような…

それに、なんといつか…いまの状況が懐かしいといつか…以前、それも俺が前世で体験した…安心感に包まれて、安息出来るような場所…。

そして、“ いまだ自分自身の存在が不安定と感じる” 。

このなんとももどかしいような感覚…。

まあ、考えるのはいいが、呼吸が出来ないのによく生きているよな…俺…。

ああ、呼吸出来ないのは文字通りの意味だ。

液体の中に居るからね。

それにしてもや、俺死んだんだよな…。

わざわざの神の口ぶりでは、俺は殺されたようなもんだ…。そう考えると自分自身から黒い感情を抱いてくるが、いまの現状と状況の把握が出来ない…。

さつきまで、といつか、いまも現在進行で混乱している自覚がある。どうすればいい?

冷静になろうとするが、現実離れをした出来事や現状、先行きの見えない事に対する不安、いくつあげてもきりがない不安要素に対して頭を痛める。

また、元の世界の神が言つていた言葉や死ぬ前の出来事で気になる点があるから整理しよう。

まず一つ目は、確定しているのはこの世界は、元の世界ではないこと。

二つ目、この世界の文明レベルは簡単に言つて地球の中世ヨーロッパに似ていること。

三つ目、死ぬ前に、どちらの世界の根源と呼べる存在が口にしていたが、その存在との邂逅が決定事項と見ていいと予想される。

四つ目、仮に文明や全ての事が中世ヨーロッパと同じだとすると、王族や貴族、宗教関係に属する特殊な階級もありそうだし、一般的な生活水準や戦争、価値観なども視野に入れたりすると様々な問題がある。

いま、思いつくのはこのぐらいだ。

焦つても仕方ないし、体の自由も利かない、やれる事と言つたら、今の現状やこれらからの事を予想し、覚悟を決めよう。

そうして、自分自身を落ち着かせながら思考に入るのだった。

どのぐらい時間が経つただろうか？

自分の中で現実を受け止め、予想される出来事に対して覚悟を決め終えたが、何分、時計がないため時間が把握出来ない。

意識が戻つてから、数分しか経つてないかもしないし、数時間か

もしれない、もしかしたら数日、数週間、数ヶ月、数年経つてゐるかもしれない。

まあ、時間の流れを掴めないからなんとも言えないが……。

そんな事を考えると異変を感じた。

体は自分の意思では本当に少ししか動かないが、そういう意味とは別の意味で、体が動いている。

そんな中、自分の感情の中に喜びというものが出てきた。

すこし驚きながらも、体の動きに身を流したのだった。

プロローグ 1（後書き）

うう……、文章つて難しい。

第1話（前書き）

皆さん久しぶりです w

そしてメリークリスマス！

今日は

主人公がついに…

なんだよ、この二人

表も裏も含めて…ね

の三本です w

体が流されるように動き、何かに縛め付けられる感覚をしながら後頭部に空気が触れる。どうやら、“外”に出たようだ。そんな中、不意に悲しみと喜びといった感情に襲われないでしまった。

‘完全に外へ出ると’、目は閉じられたままだが、光を感じるし、人の会話も聞こえる。すると、誰かに抱えられているような感覚、昔、それも前世でも体験した覚えが…

そんな事を考えると、感情が溢れ出してしまった。それは口からも出てしまい、感情の赴くままに任せてみた。

「オギヤー！ オギヤー！」
と、言ひ声。

赤ん坊の声じやん？

それから、赤ん坊の誕生への喜びの声、赤ん坊をあやすような声など。

.....。

現状を……。眞実を、というか現実を受け止めたくはないが、俺がその赤ん坊、みたいですね。なぜ、そうなるかつて？ そりや、臍へそにある違和感がなくなり、ちょっと痛みを感じるし、耳元であやすような声が聞こえるし、抱かれてるような感覚があるした……。

まあ、‘言葉の意味’、といふか、前世で聞いた言葉である。日本語、英語などの外国語にも当て嵌まらない言葉な為である。

わかりにくいくらい思ひつが、メディアや学校での教育で教えられたり、

紹介される言葉とは一致しない。前世での言葉は、だいたいの言葉はなにかしらの共通点があるが、いま、聞こえる言葉は初耳である。まあ、ただ前世で存在する言葉を正確に覚えていないし、全部が全部、学んでもないから断言できないが、まあ、初めて聞く言葉だから、‘理解’できていないので。

それに、いくら、覚悟、を決めようが、未体験で予想外な体験なのだ。

冷静に対処は出来ないし、いくら冷静になろうが、情報などが不足である。

パニックになるな。といつ方があかしいだらう。

いまだ、自分自信に起じつている出来事に啞然としていると、突如、睡魔に襲われた。
まあ、赤子の体、しかも、生まれたばかりなのだ。仕方ないと言えば仕方のない事だらう。

そして、俺は睡魔に身を任せて眠りについた。

あれからどのくらいの時間が経つたのだろうか？

眠りから覚めた思考で考えていた。

とにかく、眠りについてすぐに田が覚めた訳ではないだろ？

少なくとも数時間ぐらいかな？ 実際、出産直後の赤ん坊についての知識がないし、出産（生まれる側で）前世でも体験したことだが、何分記憶はないからなんともいえない。

しかし、赤ん坊の時の記憶のある人も実在するから不思議。これも神秘か……。となつたが、いまは関係ないので、この話は置いときます。

いま、俺は横になつている。横になつてるとこつても、出産直後の幼児だから体が思うように動かないし、体が発達してないからしゃあないんだがね。

まあ、そんでは、体をポンポンとやられてる訳ですよ。テレビとかいろいろな情報を閲覧できる物で、出産が終わつて少しの時病院の病室で母親が自分の子供をあやすような描写があるでしょ？ まあ、そんな感じでやられてる訳なんですね。

それにしてもさ、段々目が開いてきて景色が視界に入るんだが、部屋とかはまんま中世ヨーロッパで王族や貴族とかが使う部屋みたいなデザインだし、そして、俺に微笑むように見る二人の男女が目に映ります。はい。

あらやだ。恥ずかしいじゃない／＼／＼

うん……。

なに言わせんじゃ（#。。。）ゴラアアアアアアアアアアツ！

つて、誰に言つてるんだろ？ 俺。

すまねえ！なにかが我輩にあつたようだわっ！

まあ、そんな事よりさ、その男女のスペックが廃スペックなんですね。

ちなみに、廃スペックとはその名の通り、男性の方は外見は20代前半くらい？で、ヨーロッパ系の人種のようです。しかも、金髪でイケメンです。もうね？モテナイーズの総帥である我輩が嫉妬して「イケメン氏ねええええええつ！」ってなつちゃうぐらい。とにかく、なかなか…というか、すぐカツコイイです。はい。なんなの？金髪赤眼でイケメンで優しそうな顔つって？

そして、女性の方も負けずにヤヴァイです。なにがヤバいって、こちらは金髪で碧色の眼をしています。おしとやかそうに見えて、強気そうな顔つきなんだけど、その内に優しさが見える。意味がわからぬ事を口に出しちゃつたが、表現がし辛いです。そして、10代前半に見えるのが不思議。なんというか、ええ、僕のストライクゾーンにも入ってしまう美少女なんです。ありがとうございます！胸も口リつた容姿なんで小さ…ゲフンゲフン 控えめです。本当にありますがどうぞ！

そんな事を考へてみると男性が口にした。

「お、目が開いたようだね

「ええ、貴方に似て瞳の色は赤眼のようね

「あと、君の髪の色にも似て金髪が色鮮やかだよ」

とこゝの会話が聞こえる。

とりあえず、赤ん坊つて髪あんの？って疑問が先に出でてしまった俺は悪くないよね？ね？

あと、廃スペックについてはツツ 「//はあかんぜよつ！ 赤ん坊だけど、お兄さんとの約束だよつ！*。 * //

男女、とか多分、ここの世界での両親だと思われる一人を尻目にそう考えていた。

「なんというか、あんまり実感が沸かないけど、この子が僕たちの子なんだね」

「そうね…。私はこの子を産んだから、結構自覚があるけど、初めての事だから、実感が沸かないってのはわからない話ではないけどね。でも、この子は私達の子よ」

両親であつてるみたいだが、なにやら実感とか不吉な話が…………。やめるよ？悲しくなるだろ？

そして、ハツとなる父親が慌てて「違つんだつ！確かに、この子は僕たちの子でつ！」

「フフツ、冗談よ。言つてる事は分かるわ

「もう、いじわるだなあ」

そんな微笑ましい会話の中、俺の考えは杞憂だとわかった。

なんにしても、この一人が俺の両親、前世にも両親が居たため、実感がわかないのは俺も同じだ。まさか、親子揃って同じだなんてなあ。

なんにせよこれから生きていくんだし、順序を踏んでこの世界に馴染んで行こう。表も裏を含めて……ね。

せつちまつた

厨だな俺。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0713z/>

厨二病患者の基地外的思考

2011年12月25日21時49分発行